

大学講義科目への構成的グループ・エンカウンターと 討論の導入について

水谷 宗行

(京都教育大学)

The Introduction of Constructive Group-encounter and Discussion into a University lecture class

Muneyuki MIZUTANI

2002年11月30日受理

抄録：本研究は、教育心理学（教職科目・講義）に構成的グループ・エンカウンターと討論を取り入れ、各グループ活動に対する学生の参加度評価と自由記述について検討した。参加度評価は自己の参加度とグループ構成員の平均的な参加度を評価させ、また各課題についてと全体的な印象の自由記述を求めた。参加度評価は比較的高く、グループ活動の性質や順序を反映し、男女での傾向の違いも見られた。また自由記述の結果も、簡便な形の構成的グループ・エンカウンターが、講義科目での小集団活動に十分適用可能であることを示した。

キーワード：構成的グループ・エンカウンター 参加度評価 自由記述 討論 自己開示

はじめに

人間関係を育てるグループ活動の心理学的研究・実践の系譜としては、社会心理学におけるLevin,K.等のT（訓練Training）グループと臨床心理学でのRogers,C.等のエンカウンター・グループ（あるいは基本的出会いグループ Basic encounter group）の流れがある（Rogers,C.,1970）。後者は畠瀬 稔により1970年に日本に導入され、1970年代半ばから、構成的な形態のグループ活動が行われるようになった。エンカウンター・グループは、お互いに未知の10人程度のメンバーが、5・6日程度の比較の長い時間をかけ、明確な課題やスケジュールのない中で人間関係の形成を体験するものである。それに対して、構成的グループ・エンカウンターは人間関係作りのためのある程度明確な課題・活動を共通に経験しながら、人間関係の形成過程を比較的短時間に体験するよう意図されている。

國分・菅沼（1979）は大学生の人間関係開発のプログラムについて述べている。そこでは、3泊4日の合宿で構成的なグループ・エンカウンターを大学生に試み、その効果を検討しているが、授業の一環として用いられたものではない。現在では、小・中・高の特別活動の授業時間等において、クラスの人間関係づくりに用いられるようになってきている。ただここでの構成的グループ・エンカウンターは、大学の100名規模の講義授業に、半期にわたって3回の構成的グループ・エンカウンターと討論を盛り込むことで、授業全体をより充実したものにすることを目的としている。

こうした形式の筆者の試みは、1996年（平成8年）4月京都教育大学の新入生合宿の班活動として構成的グループ・エンカウンターを実施したのが最初である。そしてその年の教育心理学（通年）の講義に、構成的グループ・エンカウンターを導入し、120人規模の授業に小集団活動と討論の場を取り入れ、その後も続けてきた。平成13年度から教育心理学が半期（前期）となったが、その講義でも実施し、その2年目に当たる本年度の結果について報告する。その他、非常勤講師として担当した教育心理学（180人規模・50人規模）の半期の授業で実施し、また平成12年度京都府の認定講習会（教育心理学 160人規模）でも簡単な形で実施した。

教育心理学という授業で行う意義・目的について

ここでの構成的グループ・エンカウンターはそれ自体が目的ではなく、教育心理学という授業をささえる一部として導入している。授業全体の目的を達成するためや、講義内容の理解や深化するための討論の導入にも使用している。また授業のメンバーと何らかの人間関係を持つことは、授業への参加度を高めたり、講義への関心を高める一助になるとも考えられる。そしてまた教育に携わろうという動機を高める可能性もあると思われる。

この教育心理学の授業の概要としては、以下のことをシラバスに示している。

「現代の教育にかかわる諸問題を、主として人間関係の視点からとらえ、検討・考察する。主に児童期および青年期にいたる心的発達の問題、教授行動、教室内外での人間関係、家族等の問題を扱う。また構成的グループ・エンカウンターの実習などを行い、人間関係を自ら発展させる基礎を培う。」

全体として14回の授業時間の3回をこうした授業にあてたが、その意義を次のように考えている。

- 1) 教育心理学の問題として、学校現場での児童・生徒及び教師や保護者との人間関係を考える体験的場として、また学校現場などでの実践的問題解決を考える場として。
- 2) コミュニケーションの発達を考える体験的場として。
- 3) 小集団での討論に学生が十分に参加できるような、自己開示の機会を与え、人間関係の基礎を築く。
- 4) 小集団課題・討論においてリーダー・サブリーダーを経験し、役割の意味を考える。

この授業の内容とは少し異なるが、参照内容として、以下に小・中学校で行われている45分授業でのエクササイズの流れについて簡単に触れておく。

1. 導入 本時のねらいと大まかな内容の説明
2. ウォーミングアップ ウォーミングアップ又はリレーションづくり。その結果についてのフィードバックもある。
3. インストラクション 中心となるエクササイズの説明と「ねらい・してはいけないこと」を示す。場合によってはデモンストレーションを行う。
4. エクササイズ 教師は、ルールが守られているかを確認しながら、グループを回って援助する。
5. シェアリング 小グループでの話し合い（ふりかえりとわちあい）。また小グループ同士または全体で意見や感想をわちあう。
6. 各個人による自己評価
7. まとめ

小・中学校でのエクササイズは25分位をかけ、前後にある説明やシェアリング等の時間を合わせて45分で構成されている。ここでは90分の授業時間を使用し、またエクササイズによる人間関係づくりが目的の全てではない。

100名弱の受講生に対して、250名規模の講義室を使用し、小集団活動を行う際の余裕を確保し、通常の講義においては一定の後部座席には着席しないようにしている。

授業の流れ

第1回の授業内容は、「日本の子どもたちの特徴（国際比較）」で、この授業においてグループ分けを行い、第2回目の授業で構成的グループ・エンカウンターを行う。

毎回名簿で出席を取り、簡単な小レポートを求める（受講生を知るための工夫でもある）。

平成14年度は4月18日・6月6日・7月4日の合計3回、構成的グループ・エンカウンターと討議の場を講義に取り入れた。

第1回目の授業（4月11日）で、各グループ8・9人の10グループに分ける。最初同性の知り合い一人とペアを作らせその後できるだけ知らないペアと組み合わせ、男女同数に近い8人前後のグループを作らせる。今回は結果的に10グループになった。またこの時、今回の各グループのリーダー・サブリーダーを指名しておく。

平成14年度

第1回（4月18日）出席89名

- 1) ジャンケン列車 各自が歩いて、伴奏として講義者が「遠くへ行きたい」を歌い、その歌がとぎれたところで相手を見つけてジャンケンをし、負けた者は勝った者の両肩に手をやり、また歌にあわせて進む。最後に全体が連なり、教室の内周に全員が立って、顔を見合わせまた両横の人と握手する。ここでの意図は、動くことまたジャンケンといったゲームにより緊張感を和らげることである。
- 2) グループ内での握手 グループ内の全員と、できれば左手も添えて、握手するように指示する。相対し相手の顔を見ることになり、また余り慣れていないので緊張する人が多い。
- 3) 肩たたき（もみ） 知らない人とのペアで肩をたたき（揉む）・たたかれる役を経験させる。顔を見合わせず、また役割が決まっているので、あまり緊張せずに行え、またたたかれる側では、特にリラックスできる。
- 4) 鏡映遊び ペア的一方がある動作・表情をすると、それにあわせて他者ができるだけ正確に鏡像のようにまねる（20秒）。リードする側は工夫やある種決断が必要で緊張する。
- 5) 自己紹介ゲーム（入学後のよい思い出） 自分の所属学科・学年・氏名とともに、「大学入学後の自分の良い思い出」を簡単に述べさせる。3回以上回し、所属・氏名等はその都度述べさせる。簡単に述べさせることで大きな緊張を伴わないこと、他者の話を聞いて新たに思い出すこと、何度も所属・氏名を言うことでグループのメンバーに覚えてもらうことが容易になると思われる。ここでは、共有しやすい思い出が出て来るという点でグループとしての一体感も形成しやすいと考えている。ここまでの動作レベルのやりとりから、言語レベルでのコミュニケーションに移っている。注意点として、各メンバーの話に関心を払い、うなずくなど肯定的な反応を返すよう指示している。
- 6) 討論 前回の「国際比較 現在の日本の子どもの特徴」の授業で提示した内容について話し合わせる。話し合いでは前回の資料を各自持つように指示している。
- 7) グループ内での握手を再度行わせる。

この授業の意図については第1回目の授業（本時の前回）・本時の前と後に説明し、また次回の授業で、学生たちの自己評価についての報告を兼ねて、その意図と学生たちの結果について述べている。本時の前また自己紹介ゲームの前には、他のメンバーに対して受容的・肯定的な反応を返すように特に指示している。

2) から6) までの活動は、その後の講義で乳児期からのコミュニケーションの発達・変化の体験例として扱っている。

第2回目のグループ・エンカウンター前の授業（5月30日）のテーマは、「青年期のアイデンティティの問題とモラトリアム」である。その授業の最後に、「エンカウンターで学級が変わる ―中学校編―（図書文化）」から抜粋した資料を配付し、構成的グループ・エンカウンター授業の流れそして次回のエクササイズについて簡単に説明した。

第2回目（6月6日）

- 1) 受講生全体に対して、講義者についてのイエス・ノークイズを行う。
- 2) 握手
- 3) 自己紹介ゲーム（好きなもの・こと・ひと）
- 4) ディスカウントとストローク（家庭教師とこどもの役割演技）
- 5) 自分は～になりたい。アイデンティティとモラトリアムについての討論。
- 6) 握手

第3回目のグループ・エンカウンター前の講義では、「教室での学習、教師と児童・生徒のコミュニケーション」を行っている。また予め6月末に教育心理学に関連する領域についてのレポート提出を求めており、次回の授業で自分の書いたレポートの概要を、グループ内で発表するよう指示している。

3回目(7月4日)

- 1) 握手
- 2) 自己紹介ゲーム(各班で各自のレポート内容の発表)
- 3) ア. 教師の役割(期待される教師像) イ. 構成的エンカウンター・グループの利用・可能性 アカイまたは両方についての討論(前年度は、完全習得学習についてのディベート)
- 4) 握手

その授業の最後に、「エンカウンターで学級が変わる ―小学校編― (図書文化)」から抜粋した資料を配付し、これまでの研究で見られた効果やエクササイズの種類、そして6年間で行われるスケジュールの例などを説明した。

これらの授業では、次のような評価を各授業の最後に求めている。

その日行われた各課題について、

- 1) 自分の参加度を、1点から10点で評価する。
- 2) グループのメンバー全体の平均的な参加度を、1点から10点で評価する。
- 3) 自分の印象・感想を記す。1・2文で記している。
また全体的印象・感想を、最後に記す。

結 果 と 考 察

ここでは、第一回目の結果について述べる。

表1 各課題における自己・グループ構成員についての参加度評価の平均値

	ジャンケン 列車	握手	肩たたき	鏡映遊び	自己紹介	日本のこども	握手
自己	7.6 (2.11)	8.0 (1.66)	7.9 (2.19)	7.6 (1.41)	8.7 (1.28)	8.3 (1.57)	9.2 (1.01)
グループ	7.7 (1.73)	8.0 (1.61)	8.4 (1.58)	7.5 (1.58)	8.8 (1.23)	8.7 (1.48)	9.2 (1.03)

()内は標準偏差

表2 各課題における男女別の自己・グループ構成員についての参加度評価の平均値

	ジャンケン 列車		握手		肩たたき		鏡映遊び		自己紹介		日本のこども		握手	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
自己	7.6	7.8	7.7	8.3	7.9	8.2	7.6	7.6	8.5	8.9	8.1	8.5	8.9	9.4
グループ	7.6	7.7	7.6	8.5	8.1	8.7	7.1	7.9	8.5	9.1	8.4	8.9	8.9	9.5

表1は、各課題について、自分の参加度とグループ構成員の平均的な参加度を、各人が10段階で評価した平均値と標準偏差である。表2は、それを男女別に示しているが、標準偏差に大きな特徴はなかったので省略している。また今回は、結果の統計的検討は省略して述べて行く。

各課題への参加度の評価は、最初のジャンケン列車と鏡映遊びの参加度が少し低くなっている。また自己参加度は一般に女子が高く評価しているが、鏡映遊びだけは女子が男子と同等になっている。そして自己紹介ゲーム・討論への参加度は高く、最後の握手への参加度が最も高い。

最初のジャンケン列車は、机の間も狭く動きが限られていること、またジャンケンに負けると勝った人の肩に手を置き前進するだけということも、参加度評価の低さに影響しているだろう。しかしリラックスさせる効果はあったと、後に示した自由記述の内容からも思われる。

表3 各グループにおける自己・グループ構成員の参加度評価の平均値

グループ 番号	ジャンケン 列車		握手		肩たたき		鏡映遊び		自己紹介		日本のこども		握手	
	自	グループ	自	グループ	自	グループ	自	グループ	自	グループ	自	グループ	自	グループ
1	7.4	7.6	8.1	8.1	8.3	8.6	7.1	7.4	8.8	9.0	9.0	9.3	9.4	9.7
2	6.7	6.0	7.4	7.6	7.2	8.2	7.0	7.3	8.4	8.3	9.0	8.9	8.9	9.0
3	8.8	8.4	9.1	9.1	9.0	9.6	8.4	8.0	8.9	9.3	8.5	9.2	9.8	9.8
4	7.0	7.2	7.0	7.3	7.0	8.0	7.9	8.3	8.6	9.0	7.5	9.2	9.0	8.8
5	8.0	8.6	7.7	8.0	6.9	6.9	8.2	8.1	8.9	9.3	7.7	8.1	8.5	8.7
6	7.4	7.1	8.0	7.8	8.6	8.9	7.3	7.7	8.4	8.6	6.8	6.8	9.3	9.3
7	7.0	7.3	8.2	7.7	7.5	7.2	7.7	8.2	8.2	8.3	8.3	8.5	9.0	8.5
8	7.9	8.4	7.6	7.6	7.8	8.5	7.0	7.0	8.8	8.3	8.6	9.0	8.6	8.9
9	8.7	8.3	9.5	9.5	9.5	9.7	8.5	8.8	9.3	9.3	9.2	9.3	9.7	9.7
10	7.5	7.6	7.7	7.4	8.7	8.9	7.5	5.5	8.8	8.9	8.5	8.6	9.5	9.6

表3は、各グループの参加度評価の平均値を示している。グループによる差も相当大きいことがわかる。これらの差や各人の評価内容の一端に触れるため、次に各課題に対する自由記述の代表的なものについて列挙してゆく。

各課題についての自由記述の報告

1) ジャンケン列車

楽しみながら動けた。本当にリラックスできた。早く負けると、後が少し退屈だった。増えていく様子が見れて、楽しかった。歌が上手でした。増える度、なごんでいった。これをやらなかったら、後のゲームになかなか参加できなかったと思う。勝ち続けたかった。授業に入りやすくなった。机があるので動きづらい。「はじめは、こんなことして何になるかと思っていたが、やってみて納得した。本当に緊張がほぐれました。」久しぶりにこのようなゲームをして楽しかった。歌にびっくりしたけど、楽しかった。意図が分からず困惑した。最初はいやだったが、やってみると楽しかった。前の人の顔が見えないので、それほど照れや緊張はしなかった。何も考えず楽しめた。先生の歌の楽しさもあって、とてもよい雰囲気になったと思う。体を動かしたせいもあってか目が覚めた。知らない人同士でやってもある程度緊張がほぐれ、楽しめるものだったと思った。負けの方がいいと感じるゲームだった。

2) 握手

少し照れがあった。知らない人が多いせいか、少し緊張した。全く知らない人とも、笑顔で握手できたのでなごめた。恥ずかしいという気持ちも大きかったが、結構普通に出来た。異性の人とはなかなかしにくい(男子)。温かい手の人、少し冷たい手の人、それぞれ違う握手だった。選挙みたいでしたが、両手で握手は久しぶりでした。少し緊張がとけた。久しぶりに握手というものをした。知らなかった人と知り合いになるというのはいいことだと思った。異性との握手は苦手(男子)。目をあまり見てもらえなかった(女子)。普段なかなかすることがないのでよかった。なんか自分ではうわべだけな気がしてたんですが、みんなの笑顔を見て安心しました。相手が顔を見つめてきたので、こちらも見ないといけなかった。とりあえず握手してみた。「一瞬だけとまどってしまった。みんないい人だった。」みんな消極的だと思う(男子)。知らない人が多かったので、少し緊張した。握手は大切な気がした。なかなか良いスキンシップになった。ぐっと力を入れてくれると、なんとなくうれしくなった(女子)。ふつうにできたけど、相手を見ることができなかった(男子)。握手をしたことで、グループ活動に参加する意欲がわいた。形だけだった。手の握り方で、印象が少し変わった。親密になれたと思う。「アメリカ人ばい握手ができてなかなか素敵でした。同性とはハグもしてみました。(女性)」ただなんとなく流してしまった。「班の人の顔を覚えられた。知らない人に関わりやすくなったと思う。」

3) 肩たたき

3人で組んだので少し大変だったけど、新しいゲーム(?)みたいで楽しかった。「ちょっと緊張しました。後ろ

に立たされるというのは、どうしても。」「相手が気持ち良い様本気でもんだが、相手は少々恥ずかしがって優しくもんでくれた。それは違う意味で気持ち良かった。」「普通に気持ちよかった。それは恥ずかしいとかそういう気持ちがありませんからだと思います。」「どうしたらいいかわからず、やりにくかった。二人目にいくと、やりやすかった。」肩たたきは親にもしたことがなく、どのくらいの強さでやればいいのか、はじめ苦労した。みんな少し最初戸惑っていました。相手を身近に感じた。結構神経が疲れていたもので、気持ち良かった。肩たたきには慣れてるから相手もよろこんで良かった。異性に対しては苦手（男子）。気持ちよくて、眠りそうになる。知らない人の肩をたたくのはちょっと緊張する。私は肩こり症のようなので、肩たたきをされて気持ちよかった。相手に直にふれることで、ちょっとした体の反応から考えていることがわかり、おもしろかった。肩をたたかれるのが苦手なので、あまり参加できなかった（女子）。こっていたので少し楽になった。『相手の為に心を砕いてやった。相手もそうしてくれたので打ちとけられたと思う。』『“人とのふれ合い”を感じました。とても意外なことだった。男女バラバラにやっていて、チームワークを感じられなかった。恥ずかしがっていたけれど、いざやると逆に緊張もほぐれた。肩たたきなんて、ほとんど初対面の人とはやらないので、ビックリしました。気持ちが良く、相手に好感を持てた。体に触れる習慣も日本では余りないし、初対面ということもあって戸惑った。知らない人と接することができて、少しよかった。最近セクハラとかうるさいので怖かったですが、相手にふれるのは思ったより平気でした。異性にしてもらうと、やはりごちなく…（男子）。』『気持ちよかった。普段男友達に肩をもんでもらうことなんてないので、少しキンチョーしたけど。（女子）』人に肩もみするのが好きなので、楽しかったです。1対1なので少しは気が楽。

4) 鏡映遊び

少しずつだが照れがとれてきた。照れるというより、何すればいいのか考えてしまった。動きが速かったので、ついていくのが大変でした。機敏な動きをする人がいたり、変わったポーズをするなど、個性的だった。『どんな動きをしていいのか迷い、動けなかった。でも、相手のまねをするのはおもしろかった。』『少し恥ずかしさがあった。ただ恥ずかしさの中に楽しさがあったって笑った。』これでうちとけた。『ネタが思いつかなかった。他の人もむずかしそうだった。』相手をよく見れた。やはり少し照れがでた。自分自身は、恥ずかしくて困ってしまったけど、相手の人がすごくおもしろくて楽しめました。相手の動きを真似るのは簡単だが、自分で動きを創るのは難しいと感じた。ふっきた。おそらく幼稚園以来のものだった。『自分の動きは完璧に近かった。相手は単調な動きに終始していた。』恥ずかしかったが、コミュニケーションがとれた。少し慣れてきたので、恥ずかしがらなくなった。『思いきりやった。おもしろかった。声まねもした。』すごく頑張った。顔を見合うので照れた。『テレビで『ミラーリング』は親近感を生むというのを聞いたことがあった。実際やってみて、本当にその効果があるように思えた。』まだ照れが残っていたが、体を動かすことでさらにリラックスできたと思う。恥ずかしがること厳禁といわれたので思い切ってやったら、向こうも反応してくれたのでうれしかった。表情より動作に目がいつてしまった。真似をする側は恥ずかしくなかったけれど、される側になると急に恥ずかしくなった。みなさん地が出てきてよかったな。やってみたら、結構面白かった。知らない人とだと、大人しくしてしまう。恥ずかしいことをする方がおもしろいけど、やりすぎて失敗。最初にやる方がかなり勇気がいった。

次の課題からは、各班でメンバーの顔が全員見られるように着席し課題を行う。各班のリーダーは話の進行を主に担当し、サブリーダーは各メンバーの参加の程度を見て、必要な場合には参加を促す役割を担当している。ここからはグループとしての特徴が一層増すので、グループごとの自由記述を報告している。ただしグループ間で重複する意見は、後のグループでは省いている。

5) 自己紹介

1班 みんなお互い少しずつ自分らしさが出てきた。ネタが尽きてしまいそうになったが、皆で笑えた。だいぶリラックスできてしゃべれたと思う。皆個々に自分の思い出をおもしろおかしく話してくれて、楽しく皆を知ることが出来て良かった。話すだけなのは、他のゲームと比べ楽なのでやりやすかった。自分の思い出を話すのはけっこう好きで、とても楽しくメンバーを知ることができた。一人一人経験してる感じが違うと感じました。

- 2班 なかなか思ったことがうまく話せない。それぞれの名前や思い出・考え方を通じて、それぞれのパーソナリティーが若干つかめてきた気がする。がんばってネタを考えた。アピールしきれず。お互いのこと、わかってよかった。楽しい思い出を聞くと私も楽しくなる。何回も自己紹介をする分、集中力散漫になり、あんまり名前を覚えられなかった。一人一人異なった楽しい思い出があって、興味深かった。みんなの今までの体験を聞いて、すごいなと思いました。
- 3班 「楽しかった思い出」などテーマにそった話がうかばなくて、困った。顔と名前がはっきり一致してよかった。「結構おもしろかった。でも、自分が言うことを考えるのに必死で、他の人の名前を覚えきれませんでした。」他の人の楽しい思い出に共感できたりして、よかったと思う。意外に楽しい思い出というのは見つからないものでした。3周もしたら、完全に名前を覚えられた。
- 4班 全体的盛り上がったが、声の小さい人がいた。「皆、笑える思い出がいっぱいあって爆笑。ここで初めて先輩がいることに気づいて苦笑。」名前も知らない、言葉をかわしたこともない人に近づけたことが、自分には大きな成果だった。
- 5班 話し方からも人物がわかる気がした。何回も名前を言うのは、覚えるためにはいいと気付いた。みんなの思い出や私生活が少しわかって、最初より距離が近くなったように思う。
- 6班 「個性的な人が多いグループだとわかりました。また自分をアピールするために、いろいろなネタを駆使しました。」「やっと言葉がでてきた。やはり話を聞くことが、一番手っ取り早く相手を知る方法と感ずる。」「名前がなかなか覚えられなかった。でもこの人のことをもっと知りたいと思えた。」
- 7班 「4巡もしてしまった。だんだん楽しい思い出でなく、苦しい思い出になってしまった。」2・3周するうちに気持ちも乗ってきて、たくさんの『楽しかった思い出』を思い出すようになった。人に胸を張って語れる思い出がないと実感。
- 8班 言葉をかわすと緊張のほぐれが大きいと思いました。楽しい思い出を3回とも話せて、打ちとけた。何周もしたおかげで、普通の自己紹介では聞けないことが聞けた。グループ全体がいい雰囲気になった。テンポよくできました。
- 9班 自分の記憶をたどったり、相手の記憶で自分のわかるものがあったりすることが楽しいと思う。「みんなの1回生での思い出をいろいろ聞けて楽しかった。人数の少ない分、何回もまわったのでいっぱい話せた。」
- 10班 グループの一人一人がどのような性格の人であるかなどがわかる有効な手段であると改めて思いました。何を言えばいいか考えこんでしまった。短時間でもみんなの個性が出ると思う。

6) 前回の授業内容（現在の日本の子ども）について

- 1班 自分の考えを出すのが難しかった。日頃思っていることなど、さすがに話題は尽きることなくどんどん進めていけそうだった。人のを聞きながら、自分の意見をまとめるというのは大変でした。みんなちゃんとした意見を言うててすごかった。真面目な話だったから少し空気は重かったけど、互いに真剣に話せたと思う。既に皆恥ずかしさが消えていて、自分の考えをためらわずにどんどん言えたので、短時間にも関わらず、すごく実のある話し合いだった。一人一人、様々なことを感じその人なりに色々真剣に考えていることがわかった。皆、今の子どもに疑問を感じている点で同じだった。みんなが自分と違う意見をもっていたりして、すごく新鮮だった。どの意見もマイナス的な側面を持っていました。
- 2班 子どもに対してマイナスイメージがみんな強い。「みんな真剣に話し合っていた。授業らしかった。」やっぱり教育大生だけあって、みんな子どものことよく見てるなと思った。よく意見できた。みんなふだんからよく考えているのだと感じた。
- 3班 「前回の内容、その時自分が思ったことなど忘れてしまっていて、どう話したらいいかわからなかった。また、皆がしっかり意見をもっていて、圧倒された。」みんな真剣に話していて、いろんな意見を持っていて、どれも納得できるものばかりだった。前回欠席したが、今回のみんなの意見を聞いて、しっかりした考えを持っているなと思った。突然だったので考えがまとまる前に答えるハメになり困った。それぞれの視点での意見が聞けて考えさせられたのが良かったと思う。日本の子どもは、どこか独特のものがあるのだと思いました。
- 4班 とても真剣であった。私はあまり話せなかったかも…。短い時間だけど、ちゃんと話し合えたと思います。

「誰か一人が発言したことについて、少しはつつこんで話せた。8人というのと、密集してすわっているのが、参加しやすくしたのかも。」「大人びてる子どもが多いとの意見が出た。でもどこか空まわりしているような大人っぽさだと思う。」

- 5班 授業内容に限らず自分の考えを言えたが、内容が似かよっていた。話し合いというより、一人ずつの発表になってしまった。真剣に全員が多く意見を発表できて、いろんな観点があるんだと感じた。前は出席できなかったが、たくさん意見を言った。それぞれの考え方がわかった。みんないい意見をもっていた。「一言ずつだったのであまり話せなかったけれど、皆真剣に考えていることがあることがわかった。でもネタぎれしてきて、しんどくなったり…」グループ的にもみんな良い姿勢で話しやすかった。みんないろいろ良い意見をもっていて、共感できる部分があったり、納得行かない部分もあったりした。
- 6班 時間がなくて、全員話せなかった。全体的に発言力が弱いので積極的に発言したい。「私は専門の授業でこういうことを結構やっているから困らないけれど、みんなはかなり困っていました。なかなか進まなくて、回ってきませんでした（3回生）。」内容がとんでたので思い出しにくかった。あまりみんなグラフの要点を言わなかった。「思い出すのが大変だったようだ。でも人の意見をみんなよく聞けていたと思う。」「考える時間が長すぎた。もう少し早く話し合いに入ればよかった。」自分の意見をうまく言葉にできなかった。
- 7班 体験にもとづいての発言が多かった。お互いユニークな意見を出せたと思う。「もっとじっくり話ができばと思った。プリントを持ってきていなかった人に貸したり見せ合ったりした時、2～5で緊張がほぐれていたおかげで何げなくそのようにできたのかなと思った。」いろんな人意見が聞けてよかった。緊張が解けてやりやすかった。いきなりで、明確な意見が言えなかった。
- 8班 みんなしっかり意見言えてたけど、自分は言えなかった。フランクな感じで話せました。自分でも切れ味鋭い意見を言えて満足。言葉で意見を出す方が、気楽にできた。「自己紹介の流れでスムーズにすすんだ。皆の意見は、私が考えなかったこと多く参考になった。」みんな感じるころはよく似てると思った。意見が似てるようで少し異なったりしました。「もうちょい真剣トークがしたかった。でもいろいろな視点からの意見が知れたので、人と話すことはやっぱり大切だと思いました。」真面目に語ることも、より仲良くすることには必要だと感じることもできた。
- 9班 真面目な答えが返せなかった。「自分の親に対する思いや、現代の子どもに対する考えなど多様な意見が聞けて良かった。みんな自己紹介の時より真剣モードで話し合えた事もよかった。」みんな今までとは違ってすごく真剣に話しました。最後はフリートークで子どもの話をしました。よく話しあえた。
- 10班 グループの人たちの家庭教師先の子どものことが分かった。これまでの課題をこなしたこともあり、かなりスムーズに意見が交換されたような気がする。みんなの考えを聞いて勉強になりました。最近の子どもは本当にすすんでるなあと思いました。最近の日本の子どもとは、私たちの視点からしても、私たちとは何か違うと、メンバーの全員が感じていることがわかりました。「身近にいる子どもについて話した。子どもと接する機会が少ないと感じた。」全体の子どものというよりは一個人の子どもの話が多かった。

7) 握手

最初の握手とは異なり堅さがとれ、親しみを感じ笑顔が見られたという学生が、大多数であった。

この後、総合的評価が行われている。この評価はほとんどが肯定的なものであったが、その報告は別の機会に行いたい。

ジャンケン列車は動きもあり、リラックスさせる効果はあったと思われる。

握手は、日本人にとってあまり慣れない習慣でもあり、また見知らぬ人と両手で握手するというのは少し心理的な抵抗があったかも知れない。そして相手の顔を見て視線を合わすというのも緊張する要因である。しかし各グループでこれから取り組むという気持ちを盛り上げる効果はあっただろう。

肩たたきは、顔を見合わせない課題であり、お互いの役割が明確である。肩をたたく側も相手を気持ち良くさせているという充実感があり、またたたかれる側も大多数はリラックスした感じを味わっている。

鏡映遊びは、やはり恥ずかしいという気持ちが強く、特に動作をリードするときに緊張することがうかがわれ

る。この課題は対面し視線を合わすことも多い。そして今回の課題の中で最もダイナミックな動きや表情を要求され、動作レベルでの自己開示が要求されることになる。参加度評価は低い、ここでの緊張感や動きが、次の自己紹介ゲームへの参加度を高める要因の一つになるとも考えられる。

自己紹介ゲームで初めて言葉の使用が前面に出てくることになり、またグループメンバー全員が顔を見合わせ座ることになる。自分の氏名や所属とともに、大学入学後の楽しい思い出を簡潔に語るという課題は、ある程度自己開示を要求する。他者の思い出から自分の思い出を思い出す例も多く、共有する思い出もある。この自己紹介からその人柄・性格を思い描く学生も多い。そして「聞き手が受容的・肯定的な態度を見せるように」という指示に対しては、多くの班が自己紹介に対して全員が拍手を送るという形で示し、受容的雰囲気は高まっていたと考えられる。ただし名前を覚えやすくするために繰り返すという方針は、必ずしもうまく機能したとは言えなかった。

前回の授業内容の討論という課題でも、参加度は高かったと言える。ただ6班の参加度が低いが、その理由は自由記述の中にうかがわれる。自己紹介ゲームを経て、話すことへの抵抗感は低くなっていたと思われる。現在の日本の子どもの例に、各人が家庭教師をしている子どもが相当入っているようであり、またそのような個人レベルの話が多かったようである。全体として、子どもに対するマイナスイメージが強いという指摘もあり、資料にもとづいての話し合いは少なかったと思われる。しかしながら真剣に話し合い、他者の考えを聞いたことを評価するという意見は多い。前年度まで最初の話し合いへの参加が、グループ間で差が見られていたのに比べると、本年度の最初の話し合いは、全体として一定の成果が見られた。

この討論は、他の構成的グループ・エンカウンターと目的や機能が少し異なり、この教育心理学の学習に貢献させるという意図がある。そのためには小集団での話し合いの技術の向上も要件となる。リーダーとサブ・リーダーを置き、話の進行とメンバーの参加を促す役割を設けたのであるが、それがうまく機能したかどうかは、今回の自由記述からは推測できない。第2回目（6月6日）・第3回目（7月4日）では、構成的グループ・エンカウンターと課題部分は少なくなり、話し合い・討論の部分が増加している。そのことが講義内容の学習の深化や広がりとともに、学生間の人間関係の深まりや、また人間関係の形成過程についての理解にも一定の成果があるかは、今後検討していきたい。

最後の握手は、1回目の握手に比べ参加度が高くなっていた。

今回の資料とした参加度評定と各課題への1・2文での自由記述は、割合簡単に実施できるものであり、また資料として十分価値があったと思える。ただ今回は、それらについて特に分析を行っていない。今後その分析方法や活用については、検討する必要がある。また本年度3回の実施の中で、構成的グループ・エンカウンターとしてはグループでのシェアリング（ふり返り・分かち合い）という機会を、特に設けることができなかった。この点についても今後考えていく必要がある。

引用及び参考文献

- 國分康孝 編 1992 構成的グループ・エンカウンター 誠信書房
- 國分康孝・國分久子・片野智治・岡田弘・加勇田修士・吉田隆江 2000 エンカウンターとは何か ―教師が学校で生かすために― 図書文化
- 國分康孝・菅沼憲治 1978 大学生の人間関係開発のプログラムとその効果に関するパイロット・スタディ 相談学研究12, 2 74-84
- 畠瀬 稔・畠瀬直子 訳 1982 エンカウンター・グループ ―人間信頼の原点を求めて― 創元社 (Rogers,C. 1970 Carl Rogers on encounter groups. Harper & Row)